

青春とロマンの時代

品川地域運動を原点とし

て

小林 雅之

東京公務公共一般労働組合副委員長

― 労働組合運動に参加した経過についてお話しください。

小林 一九六五年、学生を卒業してカコストロボの開発研究職になりました。開発のかたわら、すぐにも御用組合の民主化活動をはじめます。同世代の仲間と民主化運動に立ち上がったのが労働運動に関わる直接のきっかけになりました。

なにしろ当時は活動家をどんどん拡大できる時代状況だった。たとえば大田区久が原の高級住宅地にあった独身寮に夜な夜な押しかけては、大方の青年を民青や共産党に入れる、なんてことができた。宇都宮には主

力工場があつて、そこでも裏と表の組織化が同時に進んだ。七〇年安保前後には、七五三（組合内での赤旗日曜版読者数、日刊紙数、党員数の割合）という言葉があつたほどに、どこでも革新分子の伸びる状況にあつた。うちもすごい勢力を作りながら、組合をわずか数年で民主化させていったんですね。そんなことから僕は弱冠二六歳で委員長に選ばれました。

― 当時カコストロボの労働組合は、係長あたりが組合役員で、取りまとめるという典型的な従業員組合・

小林 そうですね。古参の係長級が全部仕切つていて、「今度ボーナスは」「ベースアップは」と、盆暮れに社長宅詣でをする。そこで決められて全てが押し付けられる。企業内というより典型的同族支配だった。民主化させるために、活動家の数を頼りに、思い切つてユニオンショップをとり入れる戦略を立てました。ユニオンショップは必ずしもベターではないけれど、未加入者が多かった職場でのヘゲモニーをとるには、組合

員の分母を一気に拡大することで、会社御用派との主導権争いが可能となる。御用派はさておき、ノンポリを活動家に組織する点ではこつちの方が勝るといふ戦略だったんですね。実際に主導権を握ることができたし、民主化とともにストライキも打てる闘う路線へ転換していきました。当時悩ましかつたのは、創価学会でした。結構会社中堅にいたのと、組合内に狂信的信者がいて、繰り返しスト破りをやるわけですよ。いくら注意しても頑として反抗する。そこで組合破壊分子は排除するしかない、ユニオンショップ協定に基づいて除名そして解雇するという、あまり使わない宝刀を抜いて、渋る経営者に解雇させてしまった。無理やりショップ制で強制加入させたのはこちら。間違つているとはいえ、その人たちは宗教上の信条でもあつたわけで、今ならもっと優しい対応で接したんでしようが、私も若かつたんですね（笑い）。そんなことをしながら、最終的には凄い数の活動家集団が各職場に作られて、戦闘的な組合組織を築いていったわけです。

― 職場の状況で特徴的なこととか、
覚えていることはありませんか？

小林 当時、東京には新橋駅ビルに本社と国内商事会社、輸出会社があり、品川区上大崎のインドネシア大使館前に研究開発セクション、蒲田の呑川縁りに管球工場、地方に営業所が数箇所あった。そして宇都宮工業団地に主力工場があった。工業団地は、今は立派だけど当時は工場がぼつぼつ点在する程度で、最初に誘致されたのがカコで一万坪の広さだった。次にナショナルの家電工場が入ってきたという時代でした。

《女性工員たちが闘いを支えた》

カコの工場は女性工員が圧倒的に多かった。農繁期になるとベルトのあちこちで穴が開く。昭和四〇年代は、地方都市の工場では正社員であつても、まだ半農半労の家庭がかなりあつたんですね。当初は組合で学習会を呼びかけても、「女だてらに会社を弓引くような組合に係わるな」って父親や夫に怒られて、女性たちはすくんでいた。そこで忘年交

流会やハイキングなどいろいろやりながら一人ひとりの意識を変えていく努力を払った。女性の権利向上の要求は最も切実で、大きな闘いになったのが生理休暇と出産休暇だった。若い女性工員は働き続けたかったし、そのために休暇は権利として確保しなければならぬ。やがてこの要求は、一時金闘争と一体化して、一ヶ月に及ぶ長期ストライキへ発展しました。結果的には、全てを有給で生理休暇も出産休暇も実現する大勝利で終わりました。当初会社があまりに譲らないので、「工場のグラウンドにぺんぺん草が生えるまで闘うぞ」と解決を迫ると、労務は「やれるならやってみなさい」と言い返す。怒ったのは工場の女性たち。「ぺんぺん草作戦」と銘打った真夏の長期ストで、本当にぺんぺん草が工場のグラウンドいっぱいには生えた。彼女たちはその草を持って本社に押しかけ、本社八階の外窓にペタペタ貼り付けたんですよ。その時の窓の草は、なぜか二年ばかり、山手線の車窓から通るたびに覚えてね。可笑しいやら、あのとときの女工たちの勝利の喜ぶ姿を思

い出しますよ。戦前の雨宮製糸女工の闘い、五四年の近江絹糸女工一〇〇日スト、そして六〇年代のカコ女工三〇日ストは、どれも女性の権利休暇が絡んだスト。今につながっていることに、胸の揺さぶられる様な感動を覚えましたね。

まあ、こうした経験を通じながら、この組合は女性たちを中心に、実に戦闘的に闘う組合に成長していきます。東京の方では開発研究室がインテリ中心の指導部隊の拠点だったし、蒲田管球工場は中年のお母さんパートが中心だった。彼女たちは組合をつくった時は感激して喜びました。その後工場閉鎖、全員解雇に遭って、裁判和解の最期まで闘いぬきました。大田区労協や南部地域の支援はありがたかった。娘時代を戦争で過ごし、私たちに青春などなかったと言っていた彼女たちでしたから、「この争議は私たちにとつて第二の青春だね」と、実に生き生きと、驚くような結束力を発揮して、分厚い札束の解決金（当時は解決金を現金でやり取りできた）と立派な成果を挙げました。

六〇年代当時は、産別組織や個人加盟組合は『誰でも組合に入れる』と宣伝してはいたものの、関心の対象は正社員。パートや臨時を積極的にとりあげなかった時代でした。カコは企業内組合のときから『パートも同じ労働者。組合に入ろう』と、いち早く取り組んだので、女性たちから強い信頼関係とパワーが寄せられる組合になっていきました。お陰で民主化も急速に進んだ。だからこの組合の闘う歴史を作っていたのは女性たちだった。

――委員長になる経過と活動については

小林 一九六八年に委員長になる経過は、ユニオンショップを結んだことが重要な契機となりましたが、実は主流派になる前には、逆にショップ制がこちら側を滅ぼしかねない事態を招きました。「ユニオンショップ制なんだから、小林を除名して追放してしまえ」と、密かに会社派が乱暴な陰謀をめぐらしていた。「主導権の把握を急がなければ危ない」ということが判ったのですが、「大学出て

間もないような若造じゃ選挙は勝てない」ということになり、当時無党派だったけれど皆の信頼が厚くて良心的なベテラン研究員を委員長候補にお願いした。

もし当選できたら次期は民主化勢力の側へ委員長体制を委譲させるという長期作戦にしました。シャドウキャビネットを作ったわけです。彼は見事当選を果たして、そのため小林除名の策動は立ち消えた。それからわずか一年後に委員長ポストが私に回ってくることになったんですね。

ちょうどその頃は東大闘争が過熱状態の時期でした。僕より後に入ってきた若い闘士たちは、大学紛争の後にするようにしてカコの研究室へ入ってきた。優秀な活動家が多かったですね。共産党で活躍した中島勝彦さんもその一人だった。直ちに彼らを執行委員に抜擢すると、彼らもすぐにも組合活動の闘士として活躍するようになっていった。ところが、癖が抜けないと言うのか、仕事を抜けて東大に行っちゃ、過激派に怪我させられて帰ってくるもんだから、

労務から「お前らはどこに行ってた。なんだその怪我は」なんて追及される。僕はそれを何とかごまかして切り抜ける立ち回りをしました。徐々に民主化をしながら、三五〇人の組合組織に成長させ、闘う方向へと固めていった。南部地域でも、産別や地域で活躍する前に、既に東京も栃木も「赤い」組合として、その名も知られるようになっていたように思います。

そうそう、目黒分室の脇には希望ヶ丘公園がありましたね。今もあるのかしら？ 六〇年代だけど僕らがストライキをやるときは、決まって歌やバンド演奏を賑やかにやりました。『ハテナーズ』なんて、金属労働者の地域バンドを組んだ無名時代の泉谷しげるなどを集会に呼んでは、この公園で、ざれ歌を歌わせた。彼らも組合員だし、ストを盛り上げるのに一役かったものでした。

――品川労協と関係したのはその頃ですか

小林 品川労協から市川オルグが職場に来たことが、その後の組合を変

える決定的なことになりました。市川さんは学習会をずいぶんやってくれました。職場に専用の黒板まで用意しましたよ。地域運動には荏原友好会という、誰でも参加できる、生活と文化を労働運動に上手く取り入れた、緩やかな地域共闘組織がありました。当時、町会ぐるみの大掛かりな平和盆踊りがエスエス製薬工場前の公園でやられていて、実はそれがエスエス解雇争議を地域住民が支援してきたことに由来していると聞かされたときは衝撃をうけました。地域運動の奥深さに感動を覚えたことを今も思い出します。そのエスエス製薬の、いまは亡くなった田中の（厚）あっちゃん、荏原五反田ブロック議長を永く務めていました。市川さんと田中さんがカコに来ては、この組合は戦闘的だが、このままじゃ危ない、早く品川労協に入りなさいと強くオルグされました。六〇年代後半に、企業内組合から着実に脱皮していった時期でした。

—委員長になってからですか？

小林 委員長になると同時に市川さ

んから指南を受けました。地域は荏原五反田ブロックだったから、区労協オルグの担当は松島さんだったけど、実質的に市川さんがオルグに来られた。亡くなった霧島オルグともども、団体交渉によく出てくれました。「ああ団交はこういう風にやるもんだな」と勉強しました。松島さんはこの組合は系統が違うと思っただけで、大手組合や慮していたのかしらね、社会党系と言われる処へ彼は重点を置いていましたね。政治的にも社共統一が進んだ時代だったので、系統別にオルグ先も住み分けたのでしようね。だから荏原・五反田それから大崎ブロックは松島さんなんだけど、実際にはカコ、ソニー、三英社とかは市川さんが実質的にオルグしていました。我々はオルグから沢山の影響を受けました。僕が企業内組合に埋没しないで、民間から自治体運動の今までこうして運動しているのは、品川労協と産別地域運動時代、そして争議時代に、徹底して組織戦略的思考方法を磨くことができたお陰でして、ありがたいことだったと感謝しています。

カコ労組は品川労協への参加から、やがて全国金属へ接近します。そのときのオルグに薫陶を受けた事の一つが私には今でも宝として残されているし、それが九〇年代から二〇一六年の今に至る公共一般運動の内容にも発展的に引き継がれていることを感じます。

— 会社更生法を契機に日立資本系列への乗っ取りが始まった

小林 当時カコストロボは、創立社長の独立企業だったんです。一部上場目前でしたが、一九七〇年一月二五日に事実上倒産します。三島由紀夫が割腹騒ぎを起こした同じ日でしたから、各紙はカコ倒産を大きく報じたものの、トップ記事は三島事件で沸いた。会社更生法の適用を受けてカコへ直ちに乗り込んできた管財人は日立資本から送り込まれた人物だった。主力銀行と日立資本が結託してカコ乗っ取りを画策した挙句の偽装倒産だと、組合は直ちに見抜いて、全職場で戦闘体制に入りました。

カコストロボは、ストロボ業界で

は世界市場の七割をシェアするトツ

プメーカーでした。業界ナンバー二がナショナル、ナンバー三が東芝と、大手電気メーカーが続いた中でも、ダントツの市場独占だった。そこで日立の電気部門はカコのブランドを欲しがって、メインバンクに突然融資を拒否させて、資金繰りで窮地に追い込んで不渡りを出させ、そこで日立が乗り込むというシナリオを貫徹した。だから更生会社になってから直ちに協和銀行と日立が乗り込んできた。日立は、とにかく儲けが少なくと見た部門をどんどん切り捨てながら、中心的活動家二七人をあちこちからかき集めて、目黒の小さな分室へ閉じ込めた。私の妻も本社からここへ放り込まれた。そこでは仕事を奪われ、後に、職務怠慢をでっち上げて懲戒解雇することが用意されていたんですね。当時日立武蔵でも「ガラスの檻」事件が社会問題になりましたが、それと同じ手法でやられたわけです。日立の組合潰しはすさまじく、解雇事件は第三次まで起きました。絵に描いたような不当労働行為ですから、当然僕らは全戦

全勝しました。

― 全国金属に加盟したのは七二年でしたね。その頃の職場の状況は？
小林 七二年に全国金属へ加盟を果たしますが、その間にも妨害がさまざまにやられました。日立総連合へ入れさせる画策もやられたし、それに失敗すると全金加盟をきっかけに組合分裂に動き、拠点の宇都宮工場が最終的に分裂したところで、日立は一転して会社再建を放棄して一気に破産へ持ちこみました。それまで歴代三人の更正管財人は日立資本から送り込まれましたが、カコと組合の丸ごと切り捨てるため最終的に破産させる筋書きでした。このとき残った我々の勢力は五〇人くらいでした。日立が破産をかけると同時に、組合は品川区内目黒分室と宇都宮工場を全面占拠して、直ちに戦闘体制を築きました。当然占拠地は東京争議団共闘会議の拠点に使われたし、宇都宮工場も栃木県の地域運動の拠点的役割を果たしました。生産も自主的に続行して、国内と海外の販路確保までこぎつけていきました。こ

うして四年の闘争を経て、最終的に、裁判所の和解において、一五〇〇坪の敷地、保有する全てのブランド・意匠・特許権のほか、一億円相当を日立から奪い返しました。その原資は一万坪の工場敷地売却益と日立側の債権放棄などによって確保しました。

通算一一年間に及ぶ争議でしたが、会社更生法による企業再建と解雇闘争に九年間、最期の破産争議に二年かかりました。勝因はいろいろ挙げられますが、なんとと言っても、支援の力があつたことでした。東京の目黒分室と宇都宮工場の職場占拠を続けながら、自主生産でも販路を広げられたし、今と違って倒産争議に対する社会的世論も少しは注目を惹き寄せられた時代だったと思います。裁判所、栃木県船田県政も動かして、独占企業と金融資本へ社会的批判による打撃を与え続けたことも勝因に挙げられます。

― 企業再建闘争がここから始まったわけですね。

小林 カコストロボの争議は一九八

一年に終わりました。その後は直ちに企業再建活動に取り組んで、長期争議の後なのに息つく暇も無い状態でした。労働者自主管理企業とはいっても、僕らは経営陣に、日立に乗っ取られる前の創業者社長や輸出部長を呼び戻しました。組合民主化時代に僕らを排斥しようとした時の経営者でしたが、彼らは本物の経営プロです。なるべく通常の経営体制の中でないかと先行き持たないだろうという直感があつたからです。しかし再建闘争に最後まで残つた数十人の組合員の中には、冗談じゃないと怒る人もいました。当然でしょうけれどもね。そのときに僕はロシア革命直後にレーニンが驚くような提案をしたエピソードも借りながら説得して廻つたことを思い出します。帝政時代の銀行やマーケットのプロたちを一般労働者よりも高い報酬で処遇して、経済建設に協力を求めるためでした。ソビエト政権樹立のために血を流して闘つた労働者は当然抵抗した。レーニンは国会で幾度も提案直しながら経済建設を進めたという歴史のエピソードでした。僕たちも

市場経済の中で出来るだけ生き延びるために、そうした船出をしようとした。

『『パンとバラ』を求めた再建ロマ
ン』

小林 経営体を維持して組合員らが食べていける事と、労働者自主管理のロマンの両方を求めた、謂わば『パンとバラ』を求めた船出だった。

なぜか、このことに当時のマスコミが注目した。NHKは、カコの再建を『社長募集します』という一時間ほどの報道特集を組んだり、新聞は「昭和の忠臣蔵」とか、「左翼がプロの元経営者を呼び戻した」とか、美談ドラマ仕立てで持ち上げました。我々はそんなつもりなど全くなかった。三つの法人と、組合債権管理会社に分社して、一時的に上手いところや、早めにたたんだところもあつたりで、最終的に全てが解散したのは二〇一二年だったかしら、三〇年近く頑張つたことになりませんか。財産管理会社となつていたカコの代表責任は僕でしたが、最終的解散に当たつて残余資産の分配は、債権者

であり、争議で奮闘した元組合員たちに送り、さらに残余金は全員の総意を得て、東北大地震の義援金に換えて全労連へ託しました。

後にエッセイ集にも書いたのですが、労働争議後に自主管理再建をめざした多くの争議組合の経営努力は、結局は再び独占の土に還つていくような虚しさを否定できませんでした。私たちも途中で経営難に陥り、自ら人員整理をして、共に闘い抜いた戦友たちと泣きの別れをしなければなりませんでした。そうした苦い経験も含めて、奇跡のような労働者自主生産の全盛時代は、高揚と喪失感の交錯する青春時代でした。いまでも胸のどこかでその残照の揺らぎを覚えます。

これは倒産争議に限らず、青春を闘いで悔いなく送つた労働者には共通したことかもしれません。

高度に発達した資本主義の競争原理が働くなかで、「労働者が自主管理をやつて、何が残せる」「ユーゴの労働者自主管理から何が学べる」そんな議論もしてきました。ただいえる事は、そうした夢が易々と果たせる

筈も無いという覚悟はありながら、それにも拘わらず争議運動のすばらしいエネルギーが労働者を自主再建、自主管理へと駆り立てた。「争議のロマン」を抱いた一時代があったことは確かな事実だった。今はそんな闘いはできないだろうし、争議のあり方として想定し得ないけれど、この当時の時代状況はそうだった。

―倒産争議は大型の解決金を独占から引き出した時代だったですね

小林 時代状況をもう少し具体的に言えば、当時の高度成長の終わり頃にかかった時期の倒産争議は「不動産型争議」といわれて、工場と土地を占拠している間に地価はどんどん上がるし、担保債権者である銀行は早く債権再建回収を図ろうとした。生産資本より背景金融資本が積極的に妥協してきた時代だった。ですから何億、何十億という単位の解決金が動いた。カコ争議が八一年に解決する前後二年間の倒産争議の解決金を調べたのですが、実に六〇億円を超える金額でした。全金浜田精機が最高の三八億で、他も数億、一〇億

規模だった、当時は労働者が自主管理を通じて民主経営を真剣に目指した。いまでもそれを否定すべきではないはずです。そうした経験と教訓は、二世の今でも私は官民経営者の相手を問わず背景資本攻めの基本戦略を心がけているのは、この経験が活きているからです。僕にとって争議時代に培った知恵は宝であり、今も実戦に使える武器ですから、手入れを怠らず大切に使っています。

―東京争議団共闘会議の労働組合運動上の役割についてはどう考えていましたか

小林 七〇年代当時は首切り争議が千人、差別争議が千人も実際にいたんです。東京電力、日本航空、アイビーエムなど、大企業による反共攻撃に立ち向かった差別撤回争議が各所で戦闘的に闘われました。一方解雇争議は倒産型の大争議が沢山あった。この戦闘的集団が当時の日本労働運動の重要な牽引車にもなっていた。今日の総行動方式を生み出していく源流ですね。

《総行動方式の源流となった首都の争議運動》

小林 あの当時は浜田精機、ペトリとか金属関係の倒産争議が多くて、また東京電力、IBM、ナショナル、金銭登録機(後にNCR)、電機産業、外資系金融など、いわゆる大型差別争議があつて、倒産争議の浜田やカコの占拠現場が東京の争議のアジトになる時代でした。争議が片付けば、次はどの辺りが倒産か、早く起きないか、利便なアジトの誘致先(笑い)を待ち受ける有様でしたよ。

全国の争議が上京してくるので、東京の産別も地域共闘も非常に活気に満ち溢れていたと思います。その大きなうねりが、労働運動も突き動かしていったと思います。カコが七〇年に会社更生法適用になって本格的に争議状態に入った。その時期に、東京の真ん中で総行動方式の初期の取り組みが興ります。特筆すべきことでした。

あの時六つの大争議をまとめて統一行動で攻めようということになった。全国金属の大田区早川鉄工の倒産、映画の千代田区日活と大映の倒

産、新聞の千代田区報知印刷の解雇事件、紙パ労連の北区日本製紙、日演協の新宿区日本フィル解散争議だった。それまではめいめいが経営者や資本を攻めていたのを、東京地評が中心になって、一日中都心のあちこちをまとまって攻める戦術をとった。「六カ所全部を集めて一度に攻めれば凄いい力になる」ということでやったら、これが本場にすごい数になった。たしか千人を越えたと思う。現在と桁が違っていった。社前だけでなく社屋にまで流れ込んで、官庁や銀行のロビーを占拠状態に埋め尽くしたものだから、資本側はもう吃驚したし、恐怖で手足も出さなかった。そのショックから、しばらくしてどのビルの玄関前も、意味の無いオブリジェや植え込みが占有、敷地内行動を排除していった。これが総行動の始まりでした。

ローカルセンターが中心になって産別も越えて共同で攻めていく。七〇年のこのときの共同した争議展開が、やがて地域毎の総行動にまで広がって、全国各地の争議団が攻め上ってこられる条件もつくって行った

わけです。いうまでもなく、東京争議団がその中心で果たした役割は大きかった。

これは争議の闘い方を変えただけでなく、日本の労働運動も変えていったといえます。日本の労働運動が、共闘の原則に要求の細部までの一致を求める、それまでのドクマを捨てて、資本・官庁を総がかりで攻めるという共通点で共闘するという、統一闘争の新しい原理を掴み取った瞬間でした。

今では、市民も労働者も政党も、総がかり行動には、あれこれ要求の一致点を求めなくても共闘することは当たり前前に漸くなりましたが、当時の労働運動においては総行動方式は先駆的であり、ターニングポイントであったと思いますよ。しかしその後の労戦統一問題では、春闘再構築問題と併せて、この総行動方式が引き出した幅広の統一共闘という精神が生かされなかった点は残念に思います。

— 東京争議団共闘会議の事務局長
になったのはいつですか

小林 僕が事務局長をやったのは七九年ごろから八一年にかけて、実はわずか二年ほどです。永い間やっていたとよく言われるんですが、もちろんそれ以前から争議団共闘に九年間いました。事務局長を引き受けて間もなく勝利解決していった。そういえば、七〇年代の東京争議団は歴代事務局長には連続して全金出身者が座ったのですが、事務局長組合は早期解決すると言われた。逆に議長組合は長引くというジンクスが言われた。実際にそうだった。全金は争議にかけては総評最左翼としての闘争力があつたので、それだけ解決も早かっただけで、それを揶揄した、冷やかしか話だと思えます。

日本中の争議団が上京してきて、ウチに寝泊まりをして、東京本社抗議に打って出ていくというパターンでした。僕が事務局長の頃は、アジトでほとんど寝泊りをする生活が続いた。その間に漬物づくりを精を出すようになりましたね。春夏秋冬のいろんな漬物を手がけた。泊まりにくる争議団や、酒をぶら下げてやってくる支援者へ振る舞うには漬物が絶

やせなかったからですよ（笑い）

《争議組合は総評運動の一大行動部隊だった》

小林 そうですね。当時の争議は、職場から出された失業者軍団とか労働運動の非正規軍などと、ひがんだ考えではなくて、むしろ日本労働運動の精鋭部隊なんだという誇りさえ抱いて闘えた時代だったからかもしれません。争議団が集まると自由闊達に、労働運動論を徹して議論したりもしましたよ。もちろん争議団ですから「ご支援お願いします」と頭を下げて歩き、感謝の気持ちはいつもありましたが、だからといって決して争議団は傍流だ、正規軍じゃないなどと言う、遠慮とか卑屈さは全くありませんでした。加えて、東京争議団共闘には当時クビきり千人、差別千人もいましたから、総評や産別運動のなかでも一大行動部隊だったんです。これほど機動力を持つ部隊は当時といえども、そうそうなかったでしょう。平日昼間いつでも緊急動員できる力があるんですから、そりゃ総評や地評にすれば、こ

んな便利な動員部隊だから、それに扱ってくれましたよ。ある時、自由法曹団の坂本修弁護士から電話があつて、「小林さん、明日あたり民事執行法が通りそうなんだ、何とか集めてほしい」って。何人くらいですかと聞けば、二百人くらいだって。そんなの無茶だよ、なんて言いながら、実際急遽それぐらいは集めて国会へ押しかけることができた。

薬害や水俣闘争など、幅広い運動領域へも力を注ぐことをした。当時の争議団共闘は、行動力だけでなく、レーニン・トロツキーの戦術論や戦前の解放運動などの議論を深めたりしながら、思想も高く磨いていこうとした、そんな運動集団だったように思います。

《政治的潮流の違いで排除をしない団結方針》

小林 いま大事だったなと思うことは、組合組織は常に潮流が違うことに確執をぶつけあつてきた歴史がありますから、私が事務局長になつたときの就任挨拶では、『争議に潮流間問題を持ち込まないこと』を厳しく

訴えました。当時は、今もそうでしょうが、争議団・争議組合は、産別や政党別に色分けされ、何かと排斥の目に遭う、辛い体験を背負っていました。『争議共闘に政治的潮流の違いを優先させれば争議を狭める』これが私たち争議運動の基礎にある団結思想でした。新左翼系といわれた日立系列の争議団が、日立争議共闘から排除され、そのために東京争議団にも入れないで、御用組合からも攻撃されながら長期の解雇闘争を闘っていた。あるとき争議共闘に加えて貰えないかと、当時事務局長だった私に訴えてきたことがありました。「日共、日共と言われるとイラつく、という連中が受け入れてくれない」というのです。「それならなら、手始めにその言い方変えたら」と提案しました。「そんなことで良いんですか」きよとんとして訊ねるので、「思想変えてまで共闘したいと思わないでしょう。互いに傷付けないよう気を配りながら運動だけは一緒にやれば充分だよ」この説明に納得がいったようで、暫くして彼らは日立共闘の仲間入りを果たし、東京争議

団へも加盟してきました。日立争議で最大勢力のカコ労組が支援を開始し、それまで仲が良いとは言えなかった同じ日立争議の人たちも支援を広げてくれた。この争議団は力もあつたし、一気に勝利していった。

いろんな傾向の地方争議でも僕らは交流を深め、相互支援した。地方にも出かける力量もあつた。全金大阪のある支部が自主生産で倒産争議を闘っていた。毛沢東派を自認するほどに、彼らの拠点だった。そこへ東京争議団の渡辺清次郎議長（故人）と事務局長の小林が尋ねた。大阪争議団共闘から「危ない、行くのだけはやめときなはれ」しきりに止めたが気にせず訪問した。確かに凄かった。まるで戦場の砦そのものに、塀の周囲は鉄槍の忍び返し、門衛は松明を燃やして完全武装されている。「日共宮本修正主義粉碎」と大看板が表に掲げられ、事務所には毛沢東のかい写真が飾られていた。私たちは「東京では争議運動に政治信条の違いを持ち込まないでやってきた」と率直な意見交換をしました。二度目に訪れたときに、野外の大看

板は外されていた。毛沢東の室内写真が飾ってありましたけどね。

大阪争議団は「どないになつとらん？」と不思議がられました。のちに東京争議団OB会でも「お前さんのときは色とりどりだったねえ」と言われました。当時、「要求の一致が団結の大原則なんて決まりきったドグマだけで、統一が広げられると考えるのは観念論だ」とよく議論しました。要求や考えが少々違っていた方がいい。まずは行動を共にする団結の仕方だつてあると。もともと僕ら争議団にはそうした思想が根底にありました。

最近の市民運動と野党共闘の新しい統一戦線のあり方を見ても、要求の完全一致が無くても、共に支援行動することを重視していけば、やがてより高い次元の統一闘争への発展も可能になる。この捉え方はいまや国民レベルの確信になつていますよね。争議運動の歴史は随分早くからこのことを実践してきたといえます。総行動方式を編み出された時代に争議組合が果たした役割は実に大きいものがありました。単に行動力だ

けでなく、戦略的行動や戦術展開を、われわれは開けても暮れても議論した。また研究者や法律家、労働運動家を幅広く集めた『争議研究会』を長年開いてきました。多くの争議事例について理論と実践面から分析して、研究成果に残す刊行も行ってきました。実践面の問題についても争議団相互で厳しい論争が展開されました。当時の総評や地評また各単産組織に向けても厳しい評価をやったものでした。そうした切磋琢磨をしながら、当時の動議組合争議団は運動論としても高い水準を獲得していたと思えます。

― 金属反合（金属機械反合理化闘争委員会）が始まるのもその頃です
すね

小林 カコ争議が終る八一年の少し前です。ちょうど民間五単産をはじめとする右翼的再編成の動きが全体に強まっていくなかで、争議共闘にも影響の陰が差しかかり始めます。東京地評もナショナルセンター問題で揺れていた。金属からは杉本常幹のあとに続いた中丈之助さんが東京

地評常幹を降りる頃に、僕はまだ東京争議団の事務局長をやっていたのだけれど、彼が全金東京の書記長として戻った。すると中さんは「地評と緊密な関係にある東京争議団傘下の争議支援はもう難しい」と言い出した。それなりに東京争議団を支援指導していた人でしたが、労戦がらみなんですよ。地評は右派が事実上抜けていき、全金は右傾化を強めるもとで、地評と連携関係のあった東京争議団への支援を露骨に嫌う動きだったわけです。カコの争議はまもなく終る頃だったけれど、全金にはまだ南部、東部、三多摩でいくつも争議が続いていた。今も渋谷駅近くにある全金会館で僕は中さんに持ちかけた。「いくらなんでも自分の産別の争議を見捨てるのはないでしょう。組合費も入れている身内の争議ぐらいきちんと支援すべきだ」と。彼は「東京争議団は地評だから我々の方針とは違う」と、ごちゃ混ぜの話を繰り返した。当時東京地本にいた西村直樹さんに「なんとか金を出させて、全金東京の争議支部だけでも支援打ち切らせたくない」と相談

をもちかけ、激励してくれた。その勢いで再び中さんのところへ行つて「五百万円出してほしい」「小林君、そんな金出せるもんか」と言下に断られた。幾度も訪ねては粘って結局毎年百万円は出して貰うことになった。「これは全金の支部だけだぞ、他の組織の争議を含めたらだめだぞ」と念押しされた。金さえ出して貰えば即ち公認の運動だと、さっそく準備に入った。この時あえて「争議支援」とは銘打たずに「金属反合理化闘争」といえば文句も言い難いだろうと考えたのです。こうして「金属反合闘争委員会」の名称が生まれた。このような歴史を考えれば、東京争議団と「金属反合」は矛盾や反目する関係どころか、労戦統一問題のありに抗して、地評でも産別でも、争議支援関係を両存させようと、知恵を絞って生み出されたのが「金属反合」の誕生劇だった。「金属反合」の、全金本部に対する最初の窓口責任者は僕でしたから、東京争議団事務局長と両方兼ねながら、争議支援行動の組み合わせ方を工夫しながら進めました。まもなくしてカコ争議

が終結し、全金北辰電気の佐藤副委員長に「金属反合」の責任者をバトンタッチしました。

《争議運動は、統一と団結のリボンに》

小林 ところがその後労線問題が過熱化していくなかでの影響でしょうが、数年のうちに、いつのまにか全国金属系（後にJMIUに）の争議は「金属反合闘争委員会」として、金属オンリーでやるようになり、東京争議団共闘に全金争議は顔を出さなくなると聞き、びっくりしました。再建企業の運営に日々追われていた私でしたから、そんな事態を知らなかった。これじゃかつて全金右派が「地評は左（全労連系）」だと決め付けて東京争議団支援を排除したのと同じことの裏返しではないかと思いました。なぜなら今度は金属左派が「地評は右（非全労連）」だと思ひなして東京争議団を離れることはいおすれば、これは統一と連帯の精神でやってきた首都東京の争議運動の歴史を数十年後戻りする話です。僕は、「いままた全金流のモノロー主義

ですか」と、すっかり失望を覚えました。しかし最近は少しづつ全労連・地評の総行動をタスキ掛けしながら、東京争議団と金属反合系争議は同日に総行動参加をするようになってきたので、良いことだと感じています。

労働戦線問題で次々割れてしまった時代にあつて、争議はどっち系だからと、股裂きに遭つたり、自ら離れたりするの、結果的に争議を狭めることになる。

争議運動こそ統一と連帯を結びボンになるんだと懸命に努力した先輩争議の営為を、時には議論に載せてくれると、鬼籍に入った先輩たちも喜んでくれることでしょうね。

八〇年初頭、総評大会が労働戦線問題で荒れ始めた頃でしたが、大会で僕が争議勝利には皆さんの団結が必要だと壇上から訴えたことがありました。それが朝日の紙面にかなり大きく出ました。内容はたしか「争議組合から出た、統一せよ、連帯せよの声こそ代議員たちは傾聴すべきだ」といった論調だったように思います。

― 都区一般の運動を始める経過は？

小林 僕がカコストロボの企業再建に関係したのが八七年まででした。僕はかねてから企業経営の仕事を降りて、労働運動にいつかは戻らせて貰おうと思っていました。そこで一時期、品川の地域支部の活動を経て、一九八八年に都職労本部に組織化専従オルグとして招かれました。

《自治体職場の状況》

小林 自治体の中では、臨時職員、非常勤職員と言われる非正規公務員の形態があります。当時すでに非正規職員がどんどん増え続けていたときで、東京都内だけでも五万人、(都職労は一三万人)いた。その他にも、庁内には受付やエレベーターガールなど民間企業から委託労働者が増え続けていた。公務員組合がその人たちを組織しようとするのをバテて会社は他の職場へ引き上げてしまふ。基礎組織が作れないままに、公務員組合の良心的幹部が何度働きかけても潰される。手を焼いていた頃に、民

間の組織経験者を探せば、となつて「小林君がいるじゃないか」ということになったようでした。

― 大きな面接だったようですね

小林 この時の面接は都職労本部(当時は有楽町駅前)にあり、跡地が今の国際フォーラム)で行われて、ぞろぞろと四人付いて来たんですよ。もう今は亡くなられた人ばかりですけど、品川区職労出身で元都職労委員長の内谷正夫さん、地評の組織局長市毛晶良さん、音楽ユニオンの書記長佐藤一晴さんらに、まるで連行されるように都職労本部へ行きました。

当時は非正規の組織化など全くゼロからの状態で、いわば落下傘部隊、いや宣教師かな、一人で都職労に降り立つ思いでした。都職労に行つて判ったことは、オルグという身分も名称も公務員組合では歴史上ないということでした。僕は金属戦線や地区労を経験してきたので、オルグの存在は当たり前と思つていた。公務員組合には闇専(闇の専従)で間に合つているという考えが伝統的にあ

ったようで、そもそも組織拡大や労働者教育を専らとする専従をわざわざ配置する必要を感じていない。それに正規公務員には未組織がほとんどいない事情も働いて、非正規の組織化など認識外だった。そこへ私を呼んだ都職労左派の先見性は、やはりすごい集団だと思いましたよ。

― 都職労の書記は事務を行う人だけなんですよ。

小林 書記は専従ですが、事務が基本でオルグはしません。当時の公務員組合はどれも九五%以上組織されていきましたから、今と比べれば幸福な時代でしたが、非正規労働者は職場で増えているのに、ずっと陰に置かれていたといえます。

今でこそ、「官製ワーキングプアをなくせ」と当たり前のように言われますが、九〇年代前後でも、非正規のことを職場で持ち出すと冷淡な扱いを受けました。正規とは要求も違えば身分も違うし、すぐクビが飛んじやう人たちを、正規組合に入れたくはない、手をつけたくないという、無縁な関係だったのですね。

そこで進歩的な統一派が、組織化に小林はどうだろう、という話が先ほどの人たちによって回されていたわけです。僕は当時四五歳でした。公務員組合にはプロ専従オルグはいなかったもので、珍しさもあってか、どこへ行っても「小林オルグ」って、固有名詞のように言われました。

《徹底した妨害にも遭って》

小林 しかし右派、後の連合系の組織からは警戒されて、徹底的にマークされました。行って最初に驚いたのは、フルタイム専従なのに雇用保険や社保加入も認めようとしないうえ、ずっと妨害され続けました。いきなり都職労大会では、私を排斥する動議が自治労派から一度に四本も出される荒っぽい洗礼を受けました。知らぬ顔をして組織化を妨害する連中に僕は喧嘩だけはしないようにと、明るく接するようにはしましたが、そんなこといくら心がけようが、日々の挨拶は無視、口は利かない、僕の机の中は荒らされるわけで、しまいには自宅の子どもにまで脅迫電話と繰り返し、子たちはすっかり怯えてい

ました。あるときまたまた僕が電話に出たら、「てめえ余計なことすんじやねえ。子どもいるだろう、気をつける」だって。公務員のくせにまるで暴力団のような卑劣なことをやるもんだと思った。

明らかに苛立った判り易い反応ぶりから、どの職場の連中の仕業かすぐ解った。呆れるほど執拗で、明けても暮れても行き先々で攻撃されましたよ。

オルグの成果が出始めた時期でしたから、こちらといえば、必ず飛躍できると確信を深めて言った時期でもありましたね。十三万人の正規組合員、五万人の非正規労働者相手に一人オルグという仕事は、ただこつこつやるしかない。公務員組合には前にも後にも先例の無いオルグ活動でしょう。そこへ散々卑劣な個人攻撃にさらされましたから、こんな孤立した仕事や孤独な生活は普通なら投げ出したくなるかも知れない。ただそんなことでオルグの仕事が嫌になつたり、辞めようなどとは不思議に一度も考えなかった。きつと長い争議人生で鍛えられていたのと、

なにしろ自分ながら楽天的な気性に恵まれたと自覚してましたので（笑い）

《まずは自治体関連労組協議会を結成》

小林 一年がかりで、八九年に自治体関連労組協議会という組織を作った。運輸一般、建設一般、全国一般、福祉保育労などが各自自治体の委託先にそれなりに下部組織を持っていました。例えば都清掃局の清掃車五千台の四割くらいが民間の借り上車です。運転手は民間労働者で、ごみを投げ込む作業はだいたい正規職員でした。ここを当時の運輸一般（現・建交労）が組織していた。水道処理場の委託先や中央競馬会の臨時従事員は全国一般。そうした労働者を集めて、「自治体関連労組協議会」はやがて八千人まで組織された。委託単価の引き上げ交渉を東京都各局とやったり、都立病院清掃の安全衛生改善闘争を行ったりしました。このときの経験は、都区一般の委託民営化反対闘争と委託先の組織化に大きな力となりました。

《都区一般（現・公共一般）組織化》

小林 一年後の九〇年になって、いよいよ私の本来業務である都区一般、現在の公共一般の立ち上げにこぎつきます。この時は書記長として、都職労のオルグを兼務していました。私は都職労の身分としては書記じゃなくて、オルグという公務員の中では依然としてよく判らない身分扱いなんです。右派からは意地悪もずいぶんされた。世田谷区出身で当時都職労委員長だった三栖さんが随分心配してくれて、僕を常勤書記にしたら、弱い立場で泣かずに済むし、公務員並みの待遇になるからと、さつさと決めたと言うのです。それはオルグを辞めて都職の書記になるとだと知って、私はとんでもないことだと直感した。善意でそうしてくれたのは判るけれど、それではオルグとしての私は身動きがとれないと。案の定自治労系幹部が待ってましたと「小林書記が都区一般の書記長を兼務しているのは認められない、すぐ外せ」と集中攻撃をあげてきました。書記の雇い主に当たる執行部

の半分近くが連合系で、書記長も連合出身でした。僕は都区一般の書記長を強引に降ろされ、事務書記として机に向かう日々となりました。彼らの狙いは組合（都区一般）潰しです。当局だけでなく公務員組合からも組合潰しを食らうっていうのは我慢ならない。オルグはもちろん続けました。こっそり都庁や区役所を廻り、非正規労働者を夜集めてひっそりと会議をやる。けれどそれも監視されていた。これはいくらなんでもまともな組合活動なんかできないし、都職労の事務所を離れて、独立した拠点を確保するしかない、ある決断をしました。

決して好んでの辞職ではありませんが、オルグを貫くには常勤書記を辞するしかない。しかし公務員並みの賃金から無収入の道を自ら選ぶことは、再びあの長期に及んだ争議中の無収入の生活が延々と続くわけだし、また妻と子どもに苦勞をかけるかと思うと、さすがにそのときは、つくづく自分の身勝手を申し訳なく思い、自責の念に苛まれました。しかし私は無業ではない、職業は立派

なオルグなんだと言いつい聞かせながら都庁を後にしました。

《都職労より独立してから》

小林 この選択は一時的に自治労系幹部を安堵させたかも知れませんが。しかし私たちは逆のことを考えていました。これまで以上にオルグとして自由に動ける条件を得たことは、経済的困難はあれこそすれ、それを上回る重要な成果に必ずたどり着くと確信していましたから。

しばらく給料は貰わないことを都区一般の皆さんに了解を貰い、念願の都区一般専従オルグ兼書記長に専念することになります。その当時、私を都職労に押し込んだ一人、音楽家ユニオンの故・佐藤一晴書記長から、「自分の給料はゼロで専従書記長？ どういう見なんだ」と叱られました。「運動資金を専従給料で喰ってしまわないようにすれば、この組合は早く成長する。そう信じてやっています」と弁明したら、「なんだか訳の解らない夢を話す人だねえ」と、優しく困った顔をされました（笑い）。

三栖元都職労委員長は後に、「お前さんは組合活動家でなくて労働運動家だ。あの時解ったよ」と言われた。これが僕にはとても嬉しい褒め言葉に聞こえたです。ねえ。そしてやはり天は見捨てないと思つた。

その後全国自治労連の委員長となつた駒場忠親さんを始め都区職労の統一派は、そうした事情を良く解つていてくれて、これまで以上に支援を集中してくれました。お蔭で都区一般が何とか専従の給料を払える力をつけるのに三年はかかりませんでした。今では単組ながら一〇人を超える専従オルグを擁するまでに発展できたのですから、あの時の決断は過つていなかったのだなあと、正直ほつとしています。

組織発展は数年で一〇〇〇人、一〇年で二〇〇〇人となり、しかも自治労が支配的な区・市、都庁各局へと我が組織を進出させて、全都六三自治体に四〇自治体を越えて組織をつくつていった。

都職労から石もて追い出されるようにして独立し、非正規の大組織へとまっしぐらに突き進んだ結果は、

支援してくれた自治労連とは裏腹に、自治労にとつては、想像を超えた結果を招いたといえるでしょうね。

都庁舎から出たあと、しばらくして東京地評に居候して、それこそ「みかん箱と電話一本」じゃないけれども、机一つと電話を引いてもらつて、再出発を期しました。当時地評は、都庁とは甲州街道を挟んで渋谷区側の東京土建の四階にありました。私たちは今度は堂々と会議をやり、組合員の集まりに食事を振舞う場所も出来た。区役所や都庁の中にしだいに組合員を増やす喜びの毎日でした。組合員は月五万とか一〇万といった、貧乏人の集まりでしたが、みんなの胸には仲間を作つていく喜びが溢れていましたね。

一九九〇年に正式に産声をあげてからわずか一〇年で二千人を突破します。そのうち一三〇〇人が自治労連に加盟して、残りは連合系エリアのもとで中立的立場に据え置き、形式上は非自治労連として自治労のゾーンに拡大をどんどん図つていった。「私たちは武装中立よ」と揶揄しながら（笑い）。それが当時の運動環境

には最適の選択でしたから。非正規労働組合は総じて、しなやかに組織問題に対処してきたし、それも時代の叡智だったと思います。

発展できた要因はいろいろありますが、あえて一つを挙げるならば、都職労という生みの親組合の潮流間抗争の激烈な狭間にあつて、非正規の都区一般は『正規の組合に依存せず』、『自立性と全都単一個人別組織の原則』を貫いたからこそ、今日の前進を見ることができたんだと、確信をもって省みることができます。

― 都区一般取り組みの基本はどう考えていましたか

小林 公共一般が特に力を入れてきたのは、一つは不安定雇用との闘いです。

二五年間の間に二〇〇件の解雇撤回を闘い、九〇〇〇人の雇用保障を勝ち取ってきました。この闘いがなければ、いま三千人の組合は既になくなっていくわけですから、解雇撤回・雇用確保の戦闘力はこの組合の生命線といえます。

二つ目は、いまお話した、個人別

組合の組織幻想を追及してきたことです。しかしその組織性格に留めない、もっと重要な追求点がありました。それは全都にまたがった全職域から全職種に及ぶ、完全な単一組織を貫く組織性格を追求してきたことです。

三つ目は、労働運動全体における、二十一世紀型とも言うべき新たな挑戦課題です。それは職種職能組織を横断的に作ることで、そして企業内の賃金闘争を根本から変えていく展望を切り開くことをめざしています。このことは後ほど詳しく触れたいと思います。

― その都区一般組織の個人加盟のことをもう少し聞きたいのですが、かつて個人加盟問題がよく議論した記憶があるんだけど、当時は各個人加盟組合が解散させられ、大会で否決された全商業や総評加盟の全金、全国一般などが残っただけで、組織化の運動を大きく遅らせた。都区一般の場合には、批判や抵抗はなかったんですか？

小林 ありましたよ。小林オルグを

配置して、僕の人件費、活動費、宣伝費全部入れて年間一〇〇万円出してくれましたから、準備段階ではそれなりにオルグ活動はできました。問題は組織論を巡ってでした。どんな性格の組合を立ち上げるのか、運営の中身をどうするかの話になると僕の提案に対して都職労はまだ白紙状態だった。先ず問題になったのが、組合を団体別でなく全て個人加盟で、しかも全都単一で作る独立組織だという提案の意味がわかってもらえない。都職だつて個人加盟だということです。それは宗教団体だつて個人で入るから、それじゃあれも個人加盟とは言わないでしょう。言葉としての個人加盟の意味が違うことの説明から必要でした。一番の問題は非正規の独立した組合を作るかどうか最大の難関でした。区長、市長、知事などの使用者（任命権者）に雇われていくわけだから行政ごとに作って、都庁や各区職労に入れれば、という議論になるわけですね。

公務員は制度上、複数自治体にまたがる組合は設立できません。だから都区一般のような発想が公務員組

合には浮かび難かった。それを広域に一つにまとめざるなんて運営できないだろうという、疑念があり、加えて労使関係が正規以外にも複数窓口でできることへの反発的な抵抗感があったといえます。

実際に、東京より先行して非正規を多数組織してきた大阪衛都連でも、各市職労の中に非正規を組織内に抱え込む形がほとんどだった。吹田は独立組合がいくつもあります。労使窓口一本のもとでは、パートの交渉も市職幹部が仕切る、パート当事者は交渉にも出させてもらえない、発言もさせてもらえないところがあつたりで、当時は労使の窓口が正規組合に一本化されたところが全国的にほとんどだった。

全国自治体の非正規組合（当事二万人近く）の事務局長を僕も務めていたことがあって、各地でそうした問題を知る機会が多くありました。リストラが起きたら、納得のいかないう交渉結果に涙を吞まされる非常勤たちの話をいくつも聞かされたりました。非正規労働者の自立主体性がどこか危うい状態のま

まに、ともかく組織されているところは、やはり肝心な瞬間に闘いにくい状況に追いやられる。

東京の都区一般は初めからその設計から違っていました。それは都庁職でもなければ区職労でもない。都区一般は完全に自立組織で、職種も職域もジェネラルで、しかも全都一単組でいくという考えが最初の設計で決定的に重要なことでした。先ほども言いましたが、全都の自治体で働く非正規を単に個人加盟に留めず、単一機能の組合にまとめる構想は、当時としては稀有なことでした。ましてや公務職場にあつて、個人加盟でどこの縦割りにも属さない、広域に一つの指導部（委員長を冠するのは中央本部ただ一人）の元に統一の方針で活動する。労働協約も本部支部分会と一本化されている。この機能が存分に発揮されて、強く闘う組織になって、労働条件闘争やリストラ反対闘争で次々と勝利して爆発的な発展を遂げることが出来たわけです。

今では一〇人を越える専従オルグが全都・首都圏を駆けめぐり、単一

組織の力を発揮しています。自治体産別運動の中で非正規運動の存在価値も定着してきたといえます。

《組合費、そして独立組織の議論》

小林 もうひとつは組合費の問題でした。「組合費は二百円。都職労で決める」と幹部が言い出したので、なぜそんなに低額なのか質すと、「退職者会とかOB会で花見と紅葉狩りの為に積み立てるのが二〇〇円だから」。半ば呆れながら、そんなのでどうやって闘うのかと返すと、「親組合が金を出すから良い」という。「彼女たちにレクレーションをやらせる話じゃ無い！」これが初期の議論だった。どんなに収入が少なくても、労働の生涯ある限り自分たちを守ってくれる組合が欲しい、そのためには高くても自腹を切るといふ非正規労働者の純粋な気持ちも判つてもらうところから議論しなければならなかった。区役所での正規組合にも個人加盟の意味を理解してもらおうのに相苦勞しました。正規組合幹部に理接触してもらえないと未組織労働者に

ルグは本当に辛抱が要りました。

もうひとつの問題は、正規組合から独立した組織で進める、しかし支援は求めるといのが基本設計でした。都区一般方式は公務員運動でももちろん全国で初めてだったんですね。やがてこの考え方は「自治体一般」という名称と組織方式として全国的に拡散していきます。都区一般がモデルになっていきます。北海道から沖縄まで広がるなかで、僕は東京だけでなく、全国を駆けずり回って普及に努めました。砂地に染み入るように個人加盟運動は定着していき、まさに宣教師のごとくに、広げて歩いたんですね。

オルグに入り始めると、半年契約でクビきりが前提になっていて、人も労働組合に入りたいとか、助けてほしいとか、がながん期待が集まるんですね。相手と連絡をつけあって、コソコソと最初は一二〇人から船出を、九〇年二月にしたわけです。何年かのうちに一〇〇〇人、一五〇〇人の組織へと成長できた。

《公務職域から民間職場まで》

小林 やがて僕らは自治体一般という考え方や名称は時代に合わないと感じました。なぜかといえ、公務や公共の仕事に就いている労働者が、委託先や民間企業の中に広がっていったからです。

自治体に直接雇用された職員・職場だけが組織対象であってはいけません。すでに委託先での組織化も先行していたので、名実ともに名称も組織もそうすることにした。委託も派遣も純粋な民間労働者が公共的仕事を担っているし、大事な住民サービスをに従事している。清掃ビルメン、放置自転車管理など高齢のお年寄りも公共サービス労働者だ、行政代行的仕事をしている。いまや役所の窓口も、公立図書館にも公立保育園にも株式会社が入っている。全部公務公共の労働者なんだから組織して運動に加えていってこそ、自治体労働運動として全的責任が果たせるんだと。行政のアウトソーシングに対抗するのがわたしたちのような組合であり、持続可能なカウンター組織なんだと。

正規職員組合では法律的に直接の

組織化ができないので、まさに都区一般の仕事だと。そこで名称も自治体の一般労組を変えて、『公務公共一般労組』とした。

この考えは自治体労働運動の中で瞬く間に受け入れられていきました。大阪、京都、神奈川、そして全国へと拡散していきました。時代の状況に応じた組織化戦略を柔軟に展開することは、これからますます重要になると思うのです。

裏返せば公務員がどんどん減らされて、公務の仕事が民間にどんどん投げ捨てられて行く。それに合わせて自治体労働運動が責任を負うためのウイングを広げるためには、公共一般のようなツールが公務員組合にとっても必要になっていたわけです。正規組合へ抱え込む傾向は、やがてこうした現状の変化に対応しきれない危うさを孕んでいると私は思っていますし、少なくとも東京の公務労働運動においては、一つの歴史的事実がこのことを明らかにしてきたと思います。

九〇年代の終わりの頃でした。公務公共的組織論を巡っては、自治体

の仕事にかかわるすべての労働者を視野に入れた運動を自治労連はめざすと、全国大会で掲げられることとなったのです。もともと自治労はもともと早くからこの方針で取り組んできました。

その後、自治労連産別による非正規の組織化は、日本の公務労働運動、民間労働運動の中でも、最も先進を行く成功を納めてきました。全国の非正規労働者を集めた『自治体非正規関連公共評議会』は二万五千人になっていきます。この人数だけを見れば、全国産別組織の上位に位置するほどです。私もその事務局長や東京自治労連の副委員長も経験しましたが、主に非正規組合運動を拡大強化する責任で係わったものです。

公共一般が三〇年近くやってきて全国に及ぼした影響の一つが、全県に点在する非正規労働者を一つの個人加盟組合に結集させるという、典型を広げたことだと思います。そのことで、自治体別、つまり企業別という枠を越えた闘いが公共一般によって出現したわけです。それまでの正規公務員中心組合では起き得な

ったことです。そもそも非正規労働者は不安定雇用ですから流動します。自治体横断的な組合が必要なのは必然ともいえます。正規（本工）主義のままでは企業内闘争に閉じこもってしまいます。この自治体企業内の「本工主義の克服を」というキャッチをあちこちに持ち込んだら、「公務員の本工ってなに？」って聞かれて、半ば笑われながら説明して歩いたものでした。

この自治体一般方式、公務公共一般方式を推進した自治労連は、年間二億もの組織化資金を投じて全ての県に複数の拡大専任オルグを配置した。そのことで北海道から沖縄まで空白県がなくなっただけですね。これは日本の労働運動史における画期的だと思います。

— 公共一般の対象としている労働者とその現状、運動の方向は？

小林 わたしたちはいま、職種別の組織化に力をいれています。個々の職場には職種別に分けられるはずの組合員が二千二百人存在しており、それを全都横断的な職種別ユニオン

へ再編成しつつあります。現在六つのユニオンが職場別組織都と混在しつつ徐々に発展しています。職種の中には熟練と不熟練、資格と無資格などの違いがあります。栄養士にも管理栄養士とそうでない栄養士がいるし、看護師も正看も準看もいる。保育園には資格のない保育士も沢山います。だから同じ職種の賃金もそういう差異を繁栄した要求をいわずに厳密に組み立てなければならぬ時代に、否応なしに変化していくでしょう。職種別賃金とは、誰でも食べられる生活保障の賃金と関連性はありません。賃金論としては別です。職種別・職能別賃金を目指すには、職種別の組織化が先行していなければ、いつまでも現実性の無いものとなる。これが私たちの実践途上にある大きな課題です。

行政職公務員の賃金原理は年功序列型と終身雇用制が基本にあり、民間とも、また職能別賃金とも別世界にあります。私たちの場合は最低賃金に近いところで働かされているので、地域最低賃金をズルズルと底上げしていても気の遠くなるような話

で、自治体毎に賃金予算獲得闘争をやっているも根本から打破するような賃金闘争は何なのか、という本当のところでの筋道は見えてきません。

それには、自治体ごとという、実は企業別におかれていた同一職種同士が自治体を超えて横断的に統一賃金闘争を組むことが必要となります。全自治体や企業を相手に協定を結んで行く方法と、流動性の高い不安定雇用でしかも専門職の集まりが、労働市場の中で賃金相場の実質を形成していく。こういう闘争を組み立てないといけない。そうであれば組織もそういうように組み立てなおさないといけない。これが私たちの職種ユニオン構想です。

いま保育ユニオンは五〇〇人いますが、どこで働いても最低時給二〇〇円で働かせると要求し、エキタスと一緒にデモを常に実施し、自治体にも学校栄養士たちと一緒にストライキも打ちました。現場の非正規保育士は、全都自治体当局と保育労働者に向けて膨大なアンケートをとり、最低時給二〇〇〇円の理論構築をしてきました。既に時給一五〇〇

円を越えた保育士がどんどん増えている状況下での闘いです。ストを打った栄養士は時給1850円を突破しました。

二〇〇以上ある分会には、保育士分会、栄養士分会、図書館司書分会、非常勤講師分会など、そもそも職種別にくくられた組織が多数存在しています。これを雇い主が知事や区長、市長に当たるからということで行政縦割りにくくっていたのですが、ここには企業内運動の限界がみえています。非常勤職員という一くくりで当局は賃金を決めてしまうが、本来は職種・職能別に賃金を引き上げていかなないとだめだと考えてきました。そこで職種職能別に全都を横断的に組織編成していく取り組みをしてみました。すでに六つの職種別ユニオンがあり、二二〇〇人がいます。これからの賃金闘争にこの職種別闘争が、ナショナルセンターそして産別闘争においても決定的な変革をもたらすだろうと展望しての、取り組みが始まっています。

九五年以来、いまや旧来の日本型雇用になられてしまった、年功序列型

と終身雇用制度が厳然として残されている公務員職場ですから、「公務の中にそんな横断的な職種ユニオンが必要なのか」と聞かれます。しかし公務の非正規こそ高度な専門職がいっぱい存在している職場なのです。非正規の組合員は専門職の率が高いのです。そこを組織する時に、すべて行政区ごとに縦割りで組織することは、すなわち企業別組織であり、それだけではダメだという方針に徹底してこだわり続けています。

私がかつて論争で鍛えられた個人別組合の考え方をずうっと指標にしてきた原点がここにはあります。それが今日の公務労働運動の中にも厳然とDNAのようになって生きていくわけですね。総評労働運動の善き運動のエッセンスは、二一世紀の運動にも継承され得るのだと私は考えています。

― 自治労と自治労連の取り組みの違いって、ある？

小林 全国の自治体では、自治労、自治労連合わせたら非正規組合員が六万人前後になるでしょうか、この

数は全国単産の中でも上位に当たる規模ですから、自治体産別は大変な努力を払ってきたといえます。自治労連だけでも約四〇〇組合、二万五千人を組織化しました。全国の非正規パートだけで、毎年 of 交流集会や

定期大会には三〇〇人集まります。組織的には両産別ともががんばっていますが、闘い方、特にリストラ・解雇にさらされたときの対応は、似て非なるものがあります。僕らはクビ切り争議は断固撤回するまで闘う。自治労にはそうしたケースもあるけれど、大方が正規の抱えこみに押さえつけられて、見かけ上反対と言っても呑まされてしまうケースが多い。黙らされて表にすら出てこないところがあつて、東京では自治労を見限つてうちへ入つて闘うところが、これまでいくつも相次いでいます。違いは労働者が一番良く知っているからでしょうね。

― 八〇年代後半の労戦問題についてはどう考えますか？

小林 労戦問題は品川にいる頃からずっとありましたよね。私が都職労

に行つた八〇年代終わりの時期は、まさにルツボの中で、「分裂は何が何でもけしからん」と言われてきたことがもはや「かつてのモラル」となりつつありました。

自治労連も全教も総評産別を割つて出来た組織だし、労使協調路線に組みすることはしないという大義名分によつて、分裂は即ち悪とは看做せない話として普通に議論される時代だった。これまでに無い経験が誰もがしたわけです。新しいナショナルセンターとそれにつながる産別組織の選択に続いて、やがてローカルセンターと地区労組織にも選択の波が押し寄せていったのは九〇年代でしたね。

私は既に都職労へ移つていた時期でしたが、「全労連に結集しないのはおかしい」というレッテル張りには、都区一般（公共一般の前進）にもやられました。当時全労連オンリーの選択をする時期としては不適切な環境におかれていたわたしたちは安易に動かなかつた。自分たちの総意として確立した方針でしたが、それを直せと迫る左派勢力もいました。幾

度も「なぜ結集できないんだ」「中立は許されないんだ」と苛立つように主張し、やがて「積み残しをしてでも（割つても）来れる処から来るべき」と、自立した団結体に対してやや乱暴、というよりも無責任な「指導」がやられた時期がありました。

それは「全労連こそ唯一絶対」との立場から出る、運動狭窄症の考えだと反論しました。しかし他方では、都区一般を信頼して将来への自主性を尊重すべきだと理解を寄せてくれる幹部も多くいました。

実際に私たちは等身大の成長に合わせるようにしながら、その後着々と全労連、自治労連への結集の部隊を増やしていったのですから、あの当時、団結を大切にして、自立的に歩んできた道に過ちなど無かつたことは明らかでした。

労戦問題に限らず、「運動家は、歴史に耐える議論をしてきたか」、自戒を込めて自らを振り返らなければいけないと、時々思うことがあります。

《労戦統一論争で深められなかつた問題》

小林 当時は闘うナショナルセンターをつくるのか、それとも総評を解体して同盟と一体に連合をつくるのか、どこのレベルでも激しくやられた。産別でもそうだし、地域でもそうでしたよね。

ところが今振り返って見ても、どういう新しい運動をつくるのかっていう議論はあまりなかったように思う。つまり、労使協調か否かという体質問題を巡って左右に分れて行ったことは事実なんだけれど、「どういう運動につくり変えて行くか」という議論、つまり旧来的な企業内組合的運動をどう克服していくか、っていう自省的な議論にまで及ばなかった。

春闘は七〇年代半ばから既に連敗が続き、十数年経っていた。春闘がなぜ勝てないのかという真剣な総括をしていけば、右か左かという問題の前に、統一賃金闘争を、地域や産業別闘争として根本から見直そうという議論に行かなければならないはずだった。そういう企業の壁を乗り越えて統一して闘う運動の在り方問題と組織の在り方問題とが、ばらば

らのままに、左右路線の選択論争に加熱していった感がありました。左翼側で言えば、せっかく新しいナショナルセンターを百何十万も集めて始めようというのだから、右派路線のせいだけに済ませられない問題が当然残されてきました。企業内運動の克服の筋道、産別統一賃金闘争の道筋を指し示し、左右内外に向けた議論を展開する必要があったはずでした。

春闘連敗が続いていることに、全ては連合組織のせいだと怒る人が時々いるけれど、そう言うのは少々無邪気すぎる議論です。賃金闘争を労働市場に関与・介入する産業別闘争が全く出来ない今の労働運動の弱点を視野に入れずに、そういう議論をする人に限って、景気が良くなるか悪くなるかを占うようにして、春闘勝利の条件を語ろうとする。

景気次第で浮沈するような賃金闘争論は、資本の成果配分システムの一部に春闘自体を組み込んでしまう話でして、春闘のあり方を根本から再検討することを、労戦統一論争を経たいまでも本格的に進んでいない。

残念なことに、右と袂を分かった事実は残り、現状は見ての通り、政治策路線ではすつきりしたかもしれないけれど、企業内組織連合の大きな塊が両ナショナルセンターや産別の大部分を占めた現状をみると、総評時代と比べて根本はまだ変えられていないといわざるを得ません。その意味では、ナショナルと産別の「組織の再編成」だったかもしれないけれど、ナショナルと産別の「運動の再構築」には至っていない現状については、歯に衣をかぶせないでもっと公に堂々と率直に議論をぶつけ合う環境があつていいはずですよ。あの労戦問題のときのように。

誤解を呼ばないために言いますと、もちろん全労連をつくったことで、労働者の諸要求実現、制度政策問題や平和・国民運動など、それぞれの部面で重要な役割を果たしてきたことは明らかですし、そこは私なりに正確に評価しているつもりです。

―これからの取り組みの内容は？

小林 公共一般に二〇〇以上ある分会の一つ一つは、実は職種別職能別

にできています。職場まるごとではなくて、保育士、司書、栄養士、などと職種別に横断的に作られています。資本は失業者を備蓄して低単価で労働者を競わせるけれど、非正規公務員に多い専門職は安いところから高いところに移ろうと、常に抵抗の流れがあります。

派遣労働者も派遣先や派遣元が決めているように見えても、業務別に賃金相場が社会的に規定されて行く。そういう仕組みを顕在化させる産別運動と職種別運動とを同時包括的に進められれば、二一世紀の日本労働組合の在り方、賃金闘争の在り方を大きく変えることが出来ると考えます。ただ、そのためには職種別の組織化をうんと大きく育成するほか無いし、そうしていききたいですね。

― 青年ユニオンの組織も、そうした職種別の構想があるのですか？

小林 青年ユニオンは、これまで年齢階層をくりくりとして、二〇〇〇年に結成されました。青年労働者、とりわけフリーター、派遣労働の青年層は圧倒的多くが不安定で、労働組

合から無縁に置かれてきました。これまで組織されても、点在状態で、要求闘争など難しいとされてきました。

公共一般は、青年労働者の個人加盟を首都圏全域を視野に入れて、単一組織として作りました。強力な指導オルグ体制が必須条件とらんで、徹底的に企業の不正に立ち向かえる支援体制を作りました。

現在組合員は四〇〇人ですが、これを支えるバックアップ組織『青年ユニオンを支える会』は会員一二〇〇人いて、ここが組合費収入に二倍以上の運動資金を提供してくれる仕組みを築いています。

青年ユニオンでも、地域別組織、職種別組織に力を入れています。例えば、美容師、介護士、ブリーダー、菓子づくりのパティシエなどの職能別、そして外食産業など職域別の結果に力を入れつつあります。これから重視しなければならぬと見られているのが、ソーシャルネットワーク（SNS）の活用による、市民的と共同した社会運動の取り組みと、その中で青年層の組織を拡大するこ

とを戦略目標に明確にしていることです。SNSで反原発運動をきっかけに結成された「エキタス」は、一年に幾度か、五〇〇人、七〇〇人ものデモを繰り返しながら、最低賃金一五〇〇円実現闘争の中心的役割を果たすようになっていきます。「エキタス」は青年ユニオンの中心メンバーが集集させて築いてきた社会運動ですが、最賃闘争との結合が大きく前進しています。

― 賃金相場を形成するには、交渉相手との問題があると思うのですが。

小林 そのとおりですね。賃金相場に労働運動が関与して行くとしても、経営者・業者団体が相手となつてきます。国の政策で実現するという漠然とした構想のままでは、いつまでも実現しない。もちろん個別の経営者レベルからその水準に接近しても、業界や業種団体が腰を上げるわけがないですよ。

― 七、八〇年代の春闘で全金芝浦ブロックの呼びかけで品川と目黒です

すめた地域の各経営者団体に対する交渉実現を働きかけましたが、「労使関係に関することはやっていない」などの逃げ口上で実現できませんでしたが。

小林 ありましたね。今頃は労働組合よりも資本家の団体の方がはるかに横断的で、特に業種毎の連携は強い。医療・介護、保育、派遣などなど網の目にできていますよ。だからそこへ労働組合が賃金や労働条件問題でアプローチをかける必要がどうしてもある。かつて地区労が工場協会や商工会議所と常に話し合いをもった。そういうことがローカルセンターや地区労の機能にはあつたし、一定の影響力を持った。今こそ力を入れてやるべきですよ。

統一賃金協定を実現するには二つのアプローチがあると思います。これは労組法を再認識した活用と、もう一つは強固なストも含めた賃金闘争の社会化、これからは特にプロパガンダが必要だと思えます。まず労組法の活用では、労組法一七条が個別の経営内で組合員以外への拡張適用という、いわゆるアウトサイド

非組合員に拡張適用する条項です。

ところで一二条では個別企業とではなくて、複数経営相手に集団的協定を結ぶことができるか認めているのです。そして一八条では地域的な、統一的な拡張協定ができるか定めている。産別がこれを本気で活用しようとしていない。これは欧州的な統一賃金労働協約への接近です。展望として理論的にはあり得る。ただし現実に業者団体にうんと言わせなければ成立しない。そのプロセスとしては、個別に二千元以下では働かないと協定を結んだり、それを拡張して次第に拡張適用へ接近するとう戦略だけれど、実際的にはそれだけでは無理だと僕らは見ている。やっぱり最後には社会的な世論攻勢が必要となる。そのためには闘う新しいネットワークの形成です。

保育士があちこちにおいても、みんな未組織、点在です。だけでも保育士は食べていけない、保育士が自分の子どもを保育できない、と怒りを表明する場があったら事態は違ってくる。

介護士だって、派遣だって、わー

っと集まってくる手段は、既存の労働組合にはほとんど無理。組織に入れないから立ち上がろう、なんてほとんど不可能な状況に陥っている。だからといって、こういう新しい運動の作り方って今まで僕らの経験にはないですよ。しかし、新しい要求の集め方、怒りの集め方でいえば、同じ職種、職能同士ではモチベーションが高いし、ストレートな求心力が働くことが、だんだん判ってき始めたわけですよ。

——この運動を進めるうえで参考にしているのは

小林 景気の悪い企業の労働者は賃金闘争から置き去りにされる状況がいつまでも続くなんで、統一賃金闘争ではない。それじゃ連敗春闘から脱出できる話はいくらでもできませんよ。景気の動向しただいで勝った負けたじゃなくてね、労働市場に労働側が介入して、賃金水準確保の方程式を打ち立てさせない限りは、いくら経済大国に復活しようが、日本の労働運動は賃下げと失業の呪縛から逃れられないことを、ナショナルセ

ンターも学者も遠慮しないで、もつとはつきりさせた上で、それから先の議論をするようにすべきだと思います。

先ほどの労働協約拡張適用の例は、ヨーロッパ先進国では一般的になっ
ています。どこも組織率一〇%前後
にもかかわらず、全労働者の八〇〜
九〇%

に労働協約の拡張適用をさせてきた。
この運動を日本の条件下でどう築い
ていくか、二一世紀の日本労働運動
は本気で戦略に据えないといけない
ですよ。

それとアメリカ労働運動の、特に
外食産業の賃金闘争に見られるよう
な、やっぱりあれだけ組織してきた
から、変革がまき起こせたことは、
実にわかりやすく新鮮です。「ヒスパ
ニックなど白人系でないところに四
〜五〇万円も払ってどうするんだ」
って経営者らは猛烈な反撃キャンペ
ーンを張りますが、労組は世論も追
い風に行っている。SEIU労組など
は、同じ職種、業界へ横断的に組織
しながら実力闘争を展開し、州や市
の議会も味方につけて実現している。

こういうやり方に学ぼうとするなら、
なぜ彼らは企業の外に目を向けて組
織しているのか、企業内総連合に長
く身を置いてきた僕らは素朴に学ぶ
ことから始めなければならぬと思
うのです。

― さういふに、いま振り返って思うこ
とは

《地域活動の重視》

小林 「地域組織に必ず入る」「地域
運動と離れてはダメ」、これは公共一
般運動の原則に生かされています。

ですからいくつもの支部が地域労
連や区労協の事務局長、副議長、常
幹などの任務を引き受けて、地域運
動にいまも積極的に貢献しようと努
力しています。

地域組織の会費の拠出すら難しい
一〇人前後の支部や分会には、本部
が地域共闘強化費として全額負担し
て、全ての支部分会が地域組織に参
加するよう義務づけています。地域
運動の重要性はこれからも高まるば
かりだと思えます。

最近の江戸川動物園で起きた三役
不当配転事件と五年雇い止め制度の

撤廃闘争は、江戸川区労連の持続的
な支援なくして勝利は無かったとい
えます。二〇〇七年に原告全員が原
職復帰した中野区保育士闘争では、
中野労連が地域の組合、住民までも
動員して包み込んでくれる支援を受
けました。最後の年などは毎週区役
所に大勢の住民が座り込みを一緒
にやってくれました。そんな底力を
地域運動は発揮するんですね。

僕は今も恩師と仰ぐ市川平八さん
(今年九一歳だそうです)から、品
川時代に沢山のことを教わりました。
あの当時、青春とロマンに生きた地
域運動が、僕のDNAになつて、い
まの運動に生きづいていることを実
感します。

僕も引退の終活期に入ってますの
で、これからの若い運動家に期待し
ていることは、やはり、職種横断の
運動と地域運動、そして青年労働者
の組織化に、中心的役割を果たして
くれるに違いないと確信しています。
地域運動は公共一般運動にとつて
は、これからますます大事な活動
領域になりますから、そこにも若い
人たちの力が引き継がれていくこと

を願っています。

注) 品川と目黒の地区労は、調査に基づいて「労働条件の最低基準と目標」を決め、各職場での到達闘争と全金芝浦ブロックとともに、各経営者団体との交渉実現の働きかけをすすめました。両地区は、「労基署の管轄が同じだったこともあって、労基署との交渉（品川労協が実現したのちに目黒労協も加わった）をすすめ、職場の労基法違反は正などで数々の成果をあげました。

聞き取り日 二〇一六年九月

《プロフィール》

小林雅之 現在、東京公務公共一般

労働組合専従副委員長・

労働運動五〇年の現役活

動家として、いまでも活動

中

一九六五年カコストロボに入社と同

時に、組合の民主化活動

に入る。

一九七〇年〜八一年まで倒産争議を

闘う。

その間に東京争議団事務

局長を二期務める

一九八一年〜八七年 争議解決後、

自主管理企業の経営者、

労働組合責任者として活

動

一九八七年都職労の組織化オルグに

なる。

一九九〇年都区一般労組（現在の公

共一般）を一七〇人で立

ち上げ、専従オルグ・書

記長として活動し、現在

本部副委員長。組合員現

勢は三〇〇〇人。

★NPO法人『労働教育相談センタ

ー』現専務理事

★公共一般理論政策誌『セオリスト』

現編集長

★小説・エッセイ、作曲、諸論文な

ど諸分野で執筆・創作の文化活動

をしている。

★日本民主主義文学会会員

★大塚うたごえ酒場店長

★職場合唱団『コーラパス』事務

局長

などの活動に現在たずさわっている。

【まとめ】

闘う組合は地域の共闘の中で育ち地区労を大事にした

出席者

司会 関根 寛（元目黒労協常任書記）

市川平八（元品川労協常任書記）

中野恵善（元品川労協副議長）

藤井将貴（元目黒電波測器労組委員長）

品川の労働組合運動の黎明期

―品川に労働組合運動が生まれてくる条件というか、背景をお話してください。

市川 品川地域っていうのは東海道の宿場で栄えていた街です。立会川・大井町と目黒川・大崎にかけて、さらに、太平洋戦争前の満洲事変が起こされた昭和六年頃に完成した海岸の埋め立て地域に大小の工場がありました。東京南部工業地帯は、品川と港区から太田や目黒方面に海岸や川沿いに広がって行きました。そ

の当時の東京港っていうのは、今のほどじゃなかった。こんな話があった。台湾からバナナを持ってくるのに、横浜で下ろして汽車に乗せて東京にもってきっていたので、「横浜くんだりの田舎から持ってきて、高いバナナを買わされるなんてとんでもない」などと言われましたが、東京港は、国が戦争準備の一環として進め

据えて何日も暮らしながら四つ手つていうのをおろしてやったりしたんだ。その後、大きい工場ができてきて、海岸地域の工場街ができていった。

―品川は大崎地域を中心に総同盟の活動基盤となっていた地域でしたが、その影響は？

です。こうして埋め立てのが、今の海岸地区なんです。そして、「この埋め立て地には居住地はつくられない。生産拠点のところにした」ということで、漁師町があった旧東海道寄りに面した側には住居があったけど、埋め立ての側は工場と官公署関係しか造れなかった。また、目黒川は今みたいにストリートに東京湾に出てないでひねくれていた。埋め立て地をつくる時に、海にまっすぐ注ぐようにしたわけだ。その頃私はというと、小学校に入っていましたからね、行って釣りなんかした。まだ予定されていた工場街っていうのはポツンポツンだったから、釣りの中には、テント張ってそこに腰

市川 そうです。戦前、松岡駒吉とか、加藤勘十とかね。こういうメンバーが品川で活動し、住んでもいた。私はガキだったからわからなかったけど、大人の労働者の人たちには影響を及ぼしていたんじゃないかなって思うんですけどね。品川の労働組合の起こりの下地になっていたんじゃないかなって思いますね。左翼系の運動家では、社会党の代議士から労働農民党を作った木村喜八郎さんもいたけど、あの人は、貧乏人じやなくて大井の三俣の地主だったんです。戦後になってからだけど、私が行くとね、おかみさんが「品川の坊や、上がってご飯食べて行きなよ」なんてね。まったく気さくな奥さんで、よく行ったもんです。